



## 暮らしの風景

# 江東墨田・内部河川の水の風景

【東京都墨田区・江東区】

「水の都市」の記憶を受け継ぐ、隅田川と荒川の間、江東墨田地域。自然の地形を反映した川と江戸時代以来の掘割のグリッドが、今、人びとの生活の場として蘇る。

文——陣内秀信 *Hideobu Jinnei*  
絵——佐々木悟郎 *Goro Sasaki*



### 水の都市の記憶を受け継ぐ江東墨田

東京スカイツリー®の登場もあって、今、東京の東側がおおいに盛り上がりを見せている。東京スカイツリー®がこの墨田区押上<sup>おしあげ</sup>の位置にできる意味は大きい。地上四五〇層の展望台からの眺めは、実は、幕末に繰り返し描かれた江戸鳥瞰図の視点とほぼ同じものなのだ。その事実も、この塔を押し上に誘致するうえで重要なファクターとなった。

二十一世紀の東京人が、江戸っ子と同様に自分の町を眺められるのだから、何ともエキサイティングだ。大気の状態とともに、奥多摩、秩父の山脈に源をもつ東京の地上と地下の水の流れが想像でき、内堀・神田川・隅田川から東京湾へと注ぐ河川の流路も手にとるようにわかる。この塔からの眺望体験は、東京の姿を歴史とエコロジーの視点から振り返るのに、大きな役割を果たすに違いない。

そして、東京スカイツリー®の足下には、北十間川が流れる。それは横十間川、旧中川、小名木川とつながり、閘門<sup>せきもん</sup>を通して荒川とも結ばれる。現在、樋門<sup>ひもん</sup>で塞がれている状況を技術的に何とか克服できれば、すぐ近くの隅田川への

扇橋閘門は小名木川のほぼ中央に位置する。閘門とは、水面の高さが異なる河川を船が通航できるようにする施設。ふたつの水門に挟まれたスペース（閘室内）に船を入れ、水位を人工的に昇降させることにより船を通過させる。通航できるのは、日曜と祝日、年末年始を除く、8：45～16：30。





# 暮らしの風景



舟での回遊が可能になる。

東京は、しばしばヴェネツィアとも比較されるほどの「水の都」だった。今の中央区には、高度成長期に入る前、数多くの掘割が巡っていた。その多くが失われた今、江東墨田地域こそ、江戸以来の「水の都市」の記憶を受け継ぐ場所なのである。

## 掘割ネットワークが名所を結ぶ

江東地域に関心をもつきっかけを私に与えてくれた一冊の本がある。大正末に西村眞次によって書かれた『江戸深川情緒の研究』で、冒頭部分が実に魅力的だ。永代橋を渡って深川に入る時の光景が、大陸から鉄道でヴェネツィアの島状の旧市街に入る時のそれとよく似ているというロマンチックな記述から始まるのだ。深川は、漁師町に起源をもち、その鎮守の森である富岡八幡宮の門前に花街が生まれ、やがて木場が東隣の土地に移ってきて、近代には近くに佐賀町の流通センターが誕生したが、それらすべてが水と結びつき、生活も文化も水とともに育まれたという。現代の視点を先取りし、都市を学際的な立場で見事に描いた本である。

西の隅田川と東の旧中川に挟まれた江東墨田地域は、形成の歴史そのものが興味深い。江戸あたりまでは、古代中世の気配が漂い、香取神

社をはじめ、古い起源の寺社があり、その周辺に不規則に入り組んだ迷宮状の庶民地区が広がる。かつてはのどかな江戸近郊農村だった。その北を流れる北十間川は、自然の地形を反映し、ゆるやかにカーブしている。ところが、その南には、江戸時代に整備された東西南北に見事にグリッドをなす掘割が巡るのである。失われたもの、親水公園に姿を変えたものもあるが、まだまだその掘割ネットワークがよく受け継がれている。

江東墨田の地域には、江戸の市民が親しんだ行楽地が多く点在する。いずれも水の近くに生まれた寺社を核にしているのが面白い。亀戸天神に舟で乗り付けている様子が「江戸名所図会」に描かれている。富岡八幡宮の門前の掘割にも舟入があったし、門前の花街には戦後も船で遊びに来れたという。

## 人びとの生活の場として蘇る水辺空間

明治後半以後、江東墨田の小名木川、横十間川、旧中川などに沿ったエリアは、舟運を活かし、近代日本を支える工場地域に変身した。煙モクモクの状態は地域の発展の誇りで、小学校の校歌にもしばしばそう歌われたのだ。

工場での地下水汲み上げがもとの地盤沈下、それが引き起す水害、水の汚染など、マイナス

イメージを背負い込んだ江東墨田地域は、その後の東京の一九八〇年代以後の山の手の、西側地域における華やかな都市発展の陰で、すっかり忘れ去られていた。グローバルゼーションのありで、工場、生産部門が空洞化。商店街などの商業機能も衰退した。

しかし、このところ、流れが大きく変化しているのだ。工場が撤退した水辺空間は土壌も水質も改善され、人びとの生活の場として蘇りつつある。近年、舟運復活を求める声に押されて、社会実験で日本橋あたりから舟を出し、隅田川から小名木川に入り、扇橋閘門を抜けて、横十間川を通り、北十間川に出て、東京スカイツリー®を水の側から見ると、というツアーがたいへんな人気になっている。

足を伸ばして、弧を描く旧中川の自然を取り戻したゆったりとした水辺を船で進むのも気持ちよい。荒川ロックゲートで閘門開閉のスペクタクルを体験して、荒川の広い水面に踊り出る解放感を味わうのも、最高である。

今なお眠っているこうした江東墨田の内部河川が有効に活用され、「水の都市」東京のイメージがここから復活してくるのは、間違いない。

じんない・ひでのぶ ●一九四七年、福岡県生れ。七三〜七五年、イタリア政府給費留学生として、ヴェネツィア建築大学に留学。七六年、ユネスコのローマ・センターに留学。帰国後、八三年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。東京大学工学部助手、法政大学工学部建築学科助教授を経て、現在同大学デザイン工学部教授。建築史家。



自然な蛇行のかたちを今に残す旧中川の親水施設。